

悪人逼<sup>ニ</sup>乞食僧<sup>ニ</sup>而現得<sup>ニ</sup>惡報<sup>ニ</sup>緣<sup>第十五</sup>

昔故京時、有<sup>ニ</sup>一愚人<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>信<sup>ニ</sup>因果<sup>一</sup>、見<sup>ニ</sup>僧乞食<sup>一</sup>、忿而欲<sup>レ</sup>繫、時僧走<sup>ニ</sup>入田水<sup>一</sup>、追而執之、僧不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>忍、以<sup>レ</sup>呪縛之、愚人顛沛、東西狂走、僧即遠去、不<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>眈眈<sup>一</sup>、其人有一子、欲<sup>レ</sup>解<sup>ニ</sup>父縛<sup>一</sup>、便詣<sup>ニ</sup>僧房<sup>一</sup>、勸<sup>ニ</sup>請禪師<sup>一</sup>、々々問知<sup>ニ</sup>其狀<sup>一</sup>、而不<sup>レ</sup>肯行、二子勲重拜敬、請<sup>レ</sup>救<sup>ニ</sup>父厄<sup>一</sup>、其師乃徐行、誦<sup>ニ</sup>觀音品初段<sup>一</sup>竟、即得<sup>ニ</sup>解脱<sup>一</sup>、然後乃發<sup>ニ</sup>信心<sup>一</sup>、廻<sup>レ</sup>邪入<sup>レ</sup>正也、

- 1 愚(国)一男
- 2 愚人(国)一フメイ
- 3 便(国)一使
- 4 勸(国)一觀
- 5 々々(国)一々
- 6 然(国)一狀

悪しき人乞食の僧を逼して現に悪しき報を得る緣

第十五

昔故京の時に、一の愚人有り。因果を信はず。僧の食を乞ふを見て忿りて繫へむとす。時に僧田の水に走入る。追ひて執ふ。僧忍ぶること得ず、呪を以ちて縛る。愚人顛沛れて東西に狂れ走る。僧すなはち遠く去りて眈眈ること得ず。其の人二の子有り。父の縛を解かむとして、すなはち僧房に詣りて禪師を勸請ふ。禪師問ひて其の状を知りて行き肯へにす。二の子勲重に拝み敬ひ、

父の厄を救ふことを請ふ。其の師すなはち徐に行きて觀音品初段を誦み竟りぬ。すなはち解脱かるること得。然うして後にすなはち信ふ心を發し、邪を廻して正に入るなり。

第十四條 善業についての現報説話。三宝繪・法七、扶桑略記・齊明天皇案に引用。今昔物語集・十四ノ三十二に書承。  
二 般若波羅蜜多心經、一卷。般若心經、心經、心般若經、とも稱した。「般若」は「波若」とも書かれた。三 末詳。本説話以外に所伝をみない。

天六六〇年。七 奈良県高市郡明日香村に所在。天皇は齊明天皇。一八 大阪市天王寺区に所在。堂々芝廬寺跡がその跡地とされる。一九 未詳。本説話以外に所伝をみない。二〇 連子窓の内側に明障子が立てられる。その明障子の紙をいうのであろう。上巻四縁には「竊穿坊壁ことあった。三 原文「僧以驚悚」。この「以」は主語をうけて述語につづいている。

一般若心經に「菩提薩埵、依般若波羅蜜多故、心無罣礙、無罣礙故、無有恐怖、遠離顛倒夢想、究竟涅槃」ことある。罣礙(罣)無し、という經文と本説話の展開とに対応関係があるとする入部正統の説がある。  
二 教、擗、躍、に押韻をこころみている。  
三 底本訓釈「融(加与比)」「達(至也)」。